

キューバの中の米軍基地 ～グアンタナモ海軍基地あれこれ～

山岡 加奈子

アフガニスタンのアルカイダ捕虜がキューバのグアンタナモ米海軍基地に移送されることになったというニュースが昨年末から日本でも流れ、キューバに米軍基地が存在することを知って驚かれた人は多いと思います。米国とキューバはもう40年間国交がなく、敵対関係が続いているにもかかわらず、米軍基地はキューバが独立した20世紀初頭からずっと存在してきました。カストロは革命以来ずっと基地の存在には反対していて、基地の租借料を受け取らない態度を堅持しています。

ただキューバ政府が基地の存在に反対しても、米国の圧倒的な軍事力の前には、強制排除は不可能です。逆に米政府側も、革命を成功させたカストロをどう評価するか迷っているうちに、知らぬ間にカストロがソ連と関係を結んでおり、キューバに基地があろうとつかつに武力侵攻できない状況になっていました。1962年のミサイル危機などの苦い経験もありましたが、軍事的にはソ連を刺激しないためにキューバに近寄らない、現状維持というところに落ち着いたのだらうと思います。

基地が設置されることになった法的根拠は何かと聞かれ、現地の資料をひっくり返してみました。エルミニオ・ポルテル＝ピラ著『キューバ史——その米国・スペインとの関係——』。70年前に出版された本で、キューバに住んでいた頃、闇の古本屋から4冊セット100ドルで買った著者のサイン入り初版本、あまり本を持っていない私の数少ない稀覯本です。もっとも前の所有者は大事に持っていては読まなかったらしく、ページが切れていないままなので、ペーパーナイフで4ページごとにページを切りながら読み進んでいます。入手してもう何年も経つのに、私もまだ切り進みながら読むわけですから、読んでないページが多いことがばれてしまいます。ただ言い訳になりますが1冊600ページで4巻本ですから、全部読み通すのは覚悟がいるでしょう。古いですが革命後に出た歴史書より中立的で詳細なので、私は重宝しています。1970年代かもっと後にマイアミで再版されているので、わりに簡単に閲覧できるはずです。

この本によると、1902年の独立直後、1903年7月2日に海軍基地「譲渡」について最初の条約が両国間で結ばれたとあります。批准は翌年3月。1902年1月にキューバ独立の条件として米上院で通過したプラット修正条項にも米海軍基地の設置について言及があります。プラット修正条項はキューバ共和国憲法に含めることを条件としていたので、キューバ国内法としても強制力がありますが、その後さらに締結された条約により詳細が確定したようです。ただ条約については、キューバ政府が今年1月に発表した声明によれば、1903年2月署名の「石炭および海軍施設協定」と、同年

5月「米・キューバ関係恒久条約」がもとだと書いてあります。いずれにせよ独立の翌年の条約で決められたものであることは確かです。ただこの時点では基地はキューバ国内数カ所に作られる予定でしたが、結局グアンタナモ1カ所になりました。

当時の大統領は初代トマス・エストラダ＝パルマです。ホルヘ・ドミンゲス・ハーバード大教授が「汚職もできないほど無能」と書いておられた大統領です。余談ですが今年はキューバが独立して百周年なのですが、いろいろと屈辱的な条件をのまされた経緯があるせいか、カストロ政権にはこれを祝う気配が全くありません。

基地については1934年になって、前述のプラット修正条項がキューバ憲法から外され、5月に締結された新関係恒久条約によって、規定し直されました。米国ではフランクリン・D・ルーズベルトの時代で、彼がラテンアメリカ諸国に対して善隣外交政策を開始した頃にあたります。おそらく基地についてももう少し対等な話し合いができるように変えられたのだらうと思いますが、具体的な資料が見つかりません。当時のキューバ大統領はカルロス・メンディエタ大佐です。34年1月にクーデターで大統領になったばかり、しかし影の黒幕はすでに、59年の革命でカストロに追放される、後の独裁者バティスタだったようで、クーデターをやったのもバティスタの差し金らしい。

1995年6月に私はグアンタナモ基地を見に行きました。米軍基地はグアンタナモ湾の南半分、カリブ海への出口を占拠する形で広がっており、湾の北側はキューバ軍のグアンタナモ基地が設置されていて、二つの基地がにらみ合う形になっています。昔は米軍兵士のキューバ軍兵士への嫌がらせ、発砲事件などもあったそうで緊張もあったでしょうが、今はのどかな感じです。米軍基地のそばの高台には展望台があり、キューバ側から米軍基地を望めるようになっています。外国人観光客向けツアーもあるはず。備え付けの双眼鏡を使えば、基地内の人影もかなりはっきり見ることができます。当時はキューバから米国を目指したボート難民（バルセロス）が収容されていて、テントが白く点々と見えました。難民が多すぎてフロリダ州が悲鳴を上げ、基地に収容することになっていたからです。今はそこにアフガニスタン兵士がいるのでしょうか。

ただ基地の周辺には地雷原が広がっており、陸からの基地の往来は命がけです。ボート難民として基地に収容されたものの、キューバに戻ってきた若者に会ったことがあります。地雷にやられて片足は膝から下を失っていました。一緒にボートに乗って行った幼なじみの友人が基地のキャンプでノイローゼになってしまい、帰りたいと言いついたので一緒に脱走してきたそうです。帰りがった友人は地雷を踏んで亡くなり、彼も片足を失ったのでした。せっかく基地収容までいったのに（その数カ月後に難民は全員米国へ入国を認められています）、友人のために一緒について命がけで帰って来たのもキューバ人らしいですが、チャンスがあればまた米国に行くと言っていたのも印象的でした。難民として不法出国（キューバでは政府の出国許可なしに国を出ると違法なので）して戻ってきたからといって政府から迫害されることはないし、脚の治療もきちんと受けているようでしたが、ただ職はまだないと言っていました。淡々と話していましたね。彼によると、地雷で亡くなるキューバ人が続出したので、キャンプ収容中米軍側は地雷を撤去したそうですが、キューバ側は国防の

ためか撤去しなかったで、難民キャンプのある間は命がけの往来は続いていました。

グアンタナモを含むキューバ東部は地下水がなく、灌漑用水を含め、水の確保が昔から主要課題になっています。カストロは米国との関係が悪化してから、グアンタナモ基地への給水を停止した（川があったのをせき止めた）ので、基地で使う水は、飲用水もシャワー用の水もすべて米国本土から運んでくると聞きました。国交のない国にある基地では、維持費もかさみます。とくにソ連崩壊後、米国にとってもグアンタナモ基地の安全保障上の重要性は著しく低下していますし、基地返還について両国間で何度か交渉のアジェンダに上っているようですが、具体的には何も進んでいません。キューバ政府は米国が交渉のテーブルにつかないと批判していますが、米国政府は、キューバ側が基地返還に際して経済「封鎖」の損害として1700億ドルを超える額の賠償を要求するせいだと主張しています。キューバにとっては、米国による歴史的支配の象徴である米軍基地と経済「封鎖」は同じ根から出た問題で、解決はセットであるべきということでしょうし、理屈は通っていますが、交渉術としては非現実的です。要はキューバ側に話し合いをする気もその必要もないということではないかと思えます。

基地を巡る問題は、現在のキューバの体制や社会の抱える問題と切り離せませんが、またかつてのように重要なものでもなくなってきています。しかし、兵士を確実に収容できる場所としての価値はありますから、キューバに対する嫌がらせではないように思います（キューバに対して無神経かもしれないませんが）。基地は米国と国交すらなく米国人が自由に旅行できない国にありますから、米国内の移送反対派もアフガン空爆反対派もデモ行進できません。捕虜たちも、仮に逃げてても地雷原、地雷を越えても、島国キューバの領土内で隣組織に見つからないまま長期間逃避行は不可能ですから、逃げる気力も失せようというものです。海のないアフガニスタンから来た人が、鮫だらけのカリブ海を泳いで渡ろうと思うこともないでしょうし。うまい場所を選んだものです。

ただ移送が決まったとき、キューバ政府が非難するだろうと予想されたのですが、実際にはカストロが「できるだけ協力をする」と発言して驚きが広がりました。国務省の国際テロリズム支援国7カ国（イラン、イラク、リビア、シリア、スーダン、北朝鮮、キューバ）の中に数えられているキューバなので、テロ対策に協力することで印象を変えようとしているのかもしれませんが、それにしても意外でした。今年は国内経済がこれまでもまして厳しいと予想されているので、国内の不満を少しでも和らげるため、米国との関係改善を狙っているのではないかというマイアミの在米キューバ人団体の観測もありますが、今もよくわかっていません。

基地返還が近い将来実現することはないでしょう。キューバは米国に対抗して社会主義革命体制を樹立することには見事成功しましたが、基地についてはどうすることもできませんでした。米軍基地の存在は、独立以来のキューバの課題を象徴するものですが、今は世界的視野で米国の優位性を見せつけられるものになっています。

（やまおか・かなこ／地域研究第2部）